

第8回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「当たり前のこと」

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年 石川 茉 耶



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『当たり前前のこと』

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 一年 石川 茉 耶

カキ氷が食べたい。

こんな暑い日に、クーラーもないこの部屋で夏休みの宿題なんてやってられない。まあ、明日学校なのにもかかわらず、算数の問題集だけ残しておいたのがいけないんだけど。あーあ。

ぶつぶつと文句をつぶやきながら、芽衣は小さなため息をついた。今家にはだれもない。出ようと思えば部屋から出られるし、エアコンのあるリビングでこっそりカキ氷を食べても多分ばれないだろう。でも、言いつけを守らなかった事が判明した後のことを思うと、恐怖で何もする気がなくなる。それくらい芽衣にとって母親は絶対だった。母親が買物に出かけてから、やけに静かだ。さつきまで鳴いていたセミたちも、一斉に鳴きやんだので、部屋の温度がさらに上がったような気がした。ふと、学校の事が頭をよぎった。後少しで新学期。また皆に会える。そう考えるだけで、芽衣は興奮を抑えられなかった。無意識に目の前にある鏡を手に取り、自分の笑顔をみつめた。

うん。

やっぱりかわいいな。

なんて思っていると、宿題の事などすっかり忘れ、学校の事を思い出していた。きつと芽衣が教室に入ったとたん、大勢の「おはよう、芽衣」が聞こえるのだろう。それから色々な人の夏休みの話が芽衣の耳にとびこんでくる。だって芽衣は笑顔の中心にいる人なのだから。当たり前前のこと。だからといってクラスの子全員と話をしたり、遊んだりするわけでもない。



仲が良いといわれている四年一組にできえ、いじめはあった。これも当たり前のこと。

沙良は絶対誰とも話さない。というより、話させてもらえないといった方が正しいだろう。皆沙良は「いないもの」だと思っている。机は汚い。教科書もない。ノートは破れている。そんな日常の中沙良は生きていた。

沙良かわいそうだよなー。でも、芽衣が助けたらきつと芽衣もいじめられる。そんなのは、絶対嫌。昔は仲良かったけど、あれだけいじめられている子が幼馴染だなんて誰にも知られたくないし。せつかくクラスを中心になれたんだもん。わざわざ助けたりなんかしない方が自分のためだよね。

そう自分に言い聞かせながら、鉛筆を手に取り、足し算の問題を解き始めた。そう、沙良の事なんて忘れて…

めずらしく芽衣は集中していた。二十問くらいは解いたはずだ。静かな部屋の中、風の音だけが聞こえていた。

はずだった。

はずだったのに。

誰だろう、あの人は。何ですつとこっちを見ているのだろう。何である人は家の外にいるのに、声ははっきり聞こえるのだろう。全身の汗がひいた。鳥肌がたった。夏なのに、芽衣はこれ以上ないくらい寒かった。あの人は言った。

「芽衣、気をつけてね。芽衣なら、どんなことがあっても大丈夫なはずだよね。きつとそうだよね。芽衣なら変われるよね。」

まるで独り言のように、ぼそぼそと言った。顔を隠していたので、誰だかよくわからなかった。だけど芽衣には見覚えがあった。あの人が着ているワンピース。あれは…沙良が着ていたものだ。仲が良かったときに良く自慢していたお気に入りのワンピース。

なんだ、あんな怖い顔して。沙良じゃん。



もう、幼馴染だからってやめてよ。

もし、芽衣の家に沙良が来たことがクラスの皆に知れ渡ったら、きつといじめられるだろう。それしか頭になかった芽衣は沙良から視線をずらして大声で叫んだ。

「ちょっと沙良。もう遊びにこないですよ。いくら前仲が良かったからって、あんた今はいじめられてるじゃん。そんな子と芽衣が遊んでるって知られたら、芽衣だってあんたみたいになっちゃうの。」

風が吹いた。さらさらと木の葉を揺らした。それと同時に、感じていた視線がなくなったので、横目で窓を見ると、立っていた人影がなくなっていた。芽衣はしばらく窓から目が離せなかった。いつの間にか夕方になっていて、空が赤色に染まっていた。新学期まで後少し…。

いつものように早起きをした芽衣は、以前クラスの皆にほめられたことのあるスカートをはいていた。母親が作ってくれたオムライスを口にし、ランドセルをもって学校に行った。久しぶりにどきどきしていた。

四年一組の前で深呼吸をし、勢い良く扉を開けて、「おっはよー」と叫んだ。クラスの空気が違った。芽衣が入ってきたから、というより最初から何かあったようだ。

席に着いた芽衣は、親友のミドリに小声で事情を聞いた。ミドリは静かに答えた。

「沙良ちゃん。今まで自分がいじめられていても、何にも言わなかったでしょ。だから誰も気にしてなかったんだけど…。」

ミドリは沙良の席を見つめていた。

「飛び降りたんだって。夏休みが始まる直前に学校の屋上から。」

芽衣の笑顔が消えた。ミドリが何を言っているのかいまいわからなかったし、だいたい夏休み前に飛び降りたのなら、昨日のあの人は誰だったのか。



周囲の目などにせずつ、芽衣はミドリに叫ぶように言った。

「沙良はどうなの。死んじゃったの。ねえ、どうなの？ ミドリ…。やっぱりいじめなんて良くなかったんだよ。」ミドリがそうだね、と言ってくれることを期待して、芽衣はミドリの手を握った。しかし、期待していた答えではなく、ミドリはただ「芽衣ちゃん、そんなこと言っちゃだめだよ。皆に聞こえちゃうよ。芽衣ちゃん…。」と泣きそうに言うだけだった。

次の日。昨日のミドリの言動が気になったけれども、たいしたことではないだろうと自分にいいきかせて、母親が作ってくれたオムライスを口に学校へとむかった。四年一組の前で深呼吸。いつも必ずやる事。そして勢い良く扉を開けて「おっはよー」と叫んだ。

クラスの空気が違った。いつものように明るくない。でも昨日とも違う。最初から何かあったからではなく、芽衣が入ってきた瞬間に重くなったみたいだ。

え…。何かあったのかなあ。芽衣、昨日皆を怒らせるようなことしてないしな。とりあえず、ミドリに事情をきいてみよつと。

そう思った芽衣は、自分の席に着いて、隣に座っているミドリに話しかけた。「ねえ、ミドリ。沙良のこと以外で何かあったの。」いつもなら、「おはよう芽衣ちゃん」と誰よりも先に笑いかけてくれるミドリだったが、この日は芽衣の方を見向きもしなかった。はいていたズボンをぎゅつと握り締めて、下をむいていた。

まったく。なんなのよ。ミドリ昨日からなんか変なんだよね。まあ、いいや。違う子と話そう。

芽衣はいつも一緒に遊んでいる女の子グループに笑顔で駆け寄った。

「皆おっはよー。今日から授業だよねー。」さっきまでわいわい騒ぎながら楽しんでいた女の子たちだったが、一斉に話をやめた。そしてそのグル



ープのリーダーらしき子が皆を代表してこう言った。

「今なんか言った？」

「えー。私にも聞こえなかったよー。」

と誰かが笑いながら答えた。

「ちよつとまってよ。冗談？ 新しい遊び？ 幽霊ごっこで芽衣が鬼になつちやっただの。」

わけがわからないまま、芽衣はリーダーの女の子の肩をポンッと叩いた。

「キヤッ。何かが私を触ったー。幽霊だ幽霊。こわーい。」

女の子たちは走り回り、教室を出て行った。一瞬芽衣は現実を受け入れられなかったが、そんなことを考えている場合ではない。早く自分の身を守らなくては。

「沙良の次は芽衣なんだ。女子もよくやるよなあ。」

「じゃあ、助けてやれば。お前、芽衣と仲良かったじゃん。」

「嫌だよ、かかわりたくない。それよりサッカーしに行こうぜ。まだ時間あるし。」

男子の話声が芽衣の耳の奥まで響いた。

ああ、そうか。昨日大声で言っちゃったんだ。イジメナンテヨクナカッタ
ンダヨ。

たった一言だったのに。だからミドリは芽衣に話しかけなかったんだ。助けたら次は自分だから…。

その後は今まで経験したことのないくらい苦しい一日になった。教科書がなくなっていた。ノートは破られていた。初めて一人でお昼を食べて、初めて一人で下校した。ミドリは泣きそうな顔で芽衣を見つめていたが、女の子たちに囲まれていたので何もできなかったようだ。

家についた芽衣はイライラしていた。自分がこんなことになっているのだから、悲しむはずなのに、なぜか芽衣の心は怒りでいっぱいだった。



なんでミドリは助けしてくれないの。ずっと友達だって約束したのに。勝手にすぎるよ。第一、何で沙良がいなくなっちゃったからって次が芽衣になるのよ。もう嫌になっちゃう。全部ミドリのせいなんだから。

何気なく窓の外を見た。沙良らしきあの人が立っていた場所。誰かがいるような気がした。そんなことを思いながら眠りについた芽衣は、昔の夢をみた。沙良と楽しく遊んでいた時のことを。

いつも一緒にいた。着せ替えごっこもしたし、ままごともやった。沙良は頭が良かったので、良く芽衣の宿題を手伝ってくれたりしていた。それなのに、芽衣は、派手な女の子たちのグループにだんだん引かれていった。彼女らも、芽衣の外見を見て、まんざらでもない様子で芽衣をグループに入れてやった。そう、芽衣だけ。

芽衣は沙良に対して申し訳ないという気持ちがあったが、男子と仲良く話したり、おしゃれをしたりすることの楽しさを知り、だんだん沙良に対する気持ちが薄れていった。そんな芽衣に対して、沙良は何も言わなかった。文句も裏切られたことに対する怒りの言葉も。何もいわずに沙良は一人で生活するようになった。そして、いじめの対象になってからは、芽衣は沙良をかばうどころか、幼馴染である事実さえも消そうとしていた。あんなに一緒にいたはずなのに……。

新しい一日が始まった。こんなに学校にいきたくないと思ったことは今まで一度もなかった。だって芽衣は笑顔の中心にいる人だったのだから。こんなにいじめられるのが辛いことに今まで気づかなかったなんて信じられない。母親が作ってくれたオムライスを渋々食べて、登校した。

四年一組の前。もう大勢の「おはよう、芽衣」が聞こえないことはわかっていただけ、芽衣は深呼吸をした。そしてこの時初めて、沙良の気持ちがわかったような気がした。

いじめられる側はこんなに辛かったんだ。芽衣は自分がやられていないか



らって、沙良を放って置いて、皆と当たり前のように一日を楽しんでたんだ。沙良はきつと大変だったんだろうな。それでも、芽衣を恨まなかったんだな。きつとあの人は沙良なんだろう。飛び降りてからも芽衣の心配をしてくれてたんだ。芽衣はあんなに酷いことを言ったのに…。

なんだかとても悲しくなった芽衣は、無言で教室に入った。またあの地獄の一日が始まるのかと思うと胸が痛かった。きつと何かされる。それが怖くてたまらなかった。

教室の空気が重かった。自分の席についた芽衣はランドセルを置き、ミドリの方に視線をやった。ミドリは昨日と同じように、はいていたズボンをぎゅっと握り締めていた。

ああ、ミドリはもう話しかけてくれないんだな。芽衣が沙良にしたみたいだ。今まで沙良にしてきたことが頭に浮かんだ。そして、ひどく後悔していた。自分がやられてみないと気がつかないなんて…。

女の子たちが芽衣の机の周りを囲った。

「なんか教室に誰か入ってきたんだけど。」

「この席ってさあ、空席だよね。」

「ランドセルが置いてあるよー。」

「嫌だあ。ごみだよ。捨てちゃおーよ。」

楽しそうに女の子たちは話している。芽衣は泣きそうだった。でも、泣いてもきつと誰も助けてはくれないだろう。誰も。

「もう、やめなよ。」

誰かが泣きながら叫んだ。教室の外まで響くくらい大きな声で女の子たちに。

「ねえ、ミドリあんた何様のつもり？ 明日からどうなってもいいの。」

リーダーの女の子が睨みつけながら怒鳴り返した。ミドリはかばってくれたのだ。芽衣を助けてくれたのだった。



「あんだこそ、何様のつもりよ。沙良ちゃんのことだって芽衣ちゃんのことだって。いじめられるのがどんなに辛いことかわかっているの？ だから沙良は飛び降りちゃったんだよ。その責任は皆がとるべきだよ。皆で謝るべきなんだよ。それなのに、なんでまたいじめが始まるの？ 私たちがしなきゃいけないのは、新しいいじめを始めることじゃなくて、沙良ちゃんにあやまることじゃないの？」

いつも上品で落ち着いているミドリからは考えられないような喋り方だった。教室が静かになった。男子も遊ぶのをやめ、芽衣の周りを囲っていた女の子たちも黙って下を向いていた。芽衣は涙を流していた。

ミドリは大人だ。沙良の気持ちも芽衣の気持ちもちゃんと知っている。自分がやられたわけでもないのに、どれだけ辛いことなのかちゃんと気づいている。それなのに芽衣はミドリが助けしてくれないことに怒ったり、沙良とあんなに仲が良かったのに簡単に裏切ったり。酷いことばかりしてきた。それが酷いことだったことも気づかなかった。ああ、変わらなきゃいけないのは芽衣の方なんだ。

目の前が真っ暗になった。ミドリと女の子たちの口げんかがだんだん小さくなっていくと同時にあの人の声がかすかに聞こえた。

「ほら。やっぱり気づけた。」

その声は、今までで一番優しい声だった。

「いい加減にしなさいよ、芽衣。」

雷が落ちた。この声には聞き覚えがある。

「芽衣、あんだ今何時だと思っているの。もう、夕方の五時よ。算数は終わった？ まったく。こんな所で居眠りしないの。」

母親が芽衣の体を揺らしていた。その振動で芽衣は目が覚めた。

「え…。お母さん。今何時？ 学校は？」

「何バカなこと言っているの。学校は明日でしょ。それより、算数。終わ



賢治のまちから
高校生☆童話大賞

ったのかって聞いているの。」

芽衣にとって母親は絶対だった。でも、今はそれどころではない。怒られるのも承知で芽衣は母親に言った。

「ごめん。ちょっと出かけてくる。」

「ちょっと芽衣。もう。今日の夕飯はオムライスだからね、早く帰ってきなさいよ。」

あ……。オムライスなんだ。なんかいっぱい食べたような気がするんだけどな。まあ、いいや。

芽衣は走った。走って走って、一目散に目的の場所へと駆けていった。ベルを鳴らした。

沙良が扉を開けた。

「おっはよー沙良。ちょっと話があるの。」

芽衣は笑顔で手を振った。